

ドロシー・バトラーの本

すべての国民が障がいの有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現をめざし、今年4月1日に「障がい者差別解消法」が施行されました。

そこで約30年前に出版されながら現在も愛され読み継がれている作家のドロシー・バトラーの著書に注目します。

ドロシーは8人の子どもを育てた経験を活かし、幼児から生涯にわたる読書教育のために力を注いだ児童文学者です。障がいを持つ子どもに対しても本が、いかに大きな力を持つかを実証しました。

1冊目はドロシーが最初に書いた「クシュラの奇跡 140冊の絵本との日々」を紹介します。

障がいをもって生まれた子に何をすべきかを詳細に記録している論文でもあり、優れた児童文学賞に贈られるエリナー・ファージョン賞を受賞しています。

自身の孫娘クシュラは複雑な重い障がいをもって生まれます。夫婦は何の反応も示さない子を抱いて生後4か月から3歳9か月の間、語りかけ、約140冊の絵本を読みきかせました。絵本からあふれる母親の優しい言葉と両親のスキンシップでクシュラの脳は刺激され、障がいを乗り越え、3歳になるころには豊かな感情と言葉を習得します。母親も読み聞かせをしながらクシュラの細かい成長をみることで心が安定します。親の看護がもたらす実りに希望を見出し、深い感動を与えてくれる本です。クシュラに読んであげた絵本についても詳しく触れています。

2冊目は「赤ちゃんの本棚 0歳から6歳まで」を紹介します。

大人と絵本を開いて、絵を見せながら抱っこし、語りかけ、あやすことが赤ちゃんの発達にいかに重要であるか研究し、本の紹介を丁寧に説明しています。

冒頭に「赤ちゃんのときから、本は子どもの人生に何よりも大きな役割をになうべきであると私は信じています。幼い子どもが親やまわりの大人の助けを得て本に親しむことは、子どもの幸せで前向きな人間になる可能性を大きくします。」と始まります。

「なぜ、本を読むのか?」「どの本を何歳の時に読むか」、そして子どもの「もういちど、読んで」が成功の証であると説いています。

3冊目は幼い子どもにおくる詩集「みんなわたしの」を紹介します。

著者は「詩と子どもは、たがいに切りはなせないものです。赤ちゃんは生まれつき、リズムと人間の声の響きが大好きです。親は子どもの暮らしの中で計り知れない力を持っており、親が子どもに与えることのできる最上のものは、子どもが思考と想像ができ

るようにし、自己表現の道具である『ことば』を習得させる事です。」とっています。この詩集には、わらべ歌、踊りに合わせて口ずさむ詩、聞き入る詩、しずかに夢を育む詩など幼い子どもたちの心にうったえ、喜びを湧き立たせ、口ずさみたくなる詩が収められています。子どもに詩を読み聞かせるときのヒントも書かれており、『ことば』を通じて親子の楽しい体験ができるような詩集です。

図書館では障がいを持つ人も持たない人も学び合い、利用しやすくするために「障がいを理解し共に生きるためのコーナー」を大人向けにも、子どもに向けても設けています。今後、資料の充実なども図り、すべての人が共生できる図書館を目指していきます。ぜひ、ご来館ください。